

マネキンの家

井口昭久

私の家は団地のはずれにある。

団地は、戦国時代の合戦場の跡が雑木林になり、その森を伐採して造成されたもので、台地の上にある。今では団地の住人は高齢になって、住民は少なくなった。

家への帰路、国道を南に回ると片道一車線の旧街道に出る。その辺りには江戸時代からの旧市街地が団地を囲むように残っている。

街道の左側に、玄関が緑色の看板屋がある。看板はあるが営業をしている気配はない。右側にはクリーニング屋があつたらしい。クリーニングの看板だけが家の庇にかかつている。300メートル進むと30度の角度で左に折れ

る脇道がある。

夕暮れにその脇道を覗くように見ると、暗い路地が続いている中に明かりがついている家が一軒だけ見える。古い民家が並んでいる中で、そこだけが明るい。旧街道は渋滞するので、50メートルほど奥まった所から漏れている光が毎日目に入った。

車からは明かりが見えるが、家の中までは見えない。ひな祭りの頃には、ほんぼりに灯を灯している家族の生活を想像して、その明かりを眺めていた。夏の日には家族でかき氷を食べている姿を想像していた。

私はその脇道を眺めるだけで、街道をそれ

て、その家の前を通過したことは無かった。

明かりに気が付いた頃は、玄関の電燈が放つ光であると想像していたが、その単調さから蛍光灯の照明であると思うようになった。

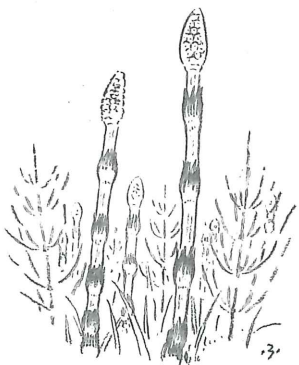
うっすらと花嫁衣装のような物が見えた時は、ショーウィンドーの明かりではないかと思つた。麦わら帽子をかぶつたマネキンが見えたような気がしたときも、そう思つた。

真夜中でも光は道路の一角を照らしていた。私が入院して、病院から帰るときは、ほのかに青白く湯気のように優しく気であつた。

秋の祭りが過ぎても、影を作らない光は変わることはなかった。

祭りが終わった頃から、明かりが消えたことが無かつたことを不思議に思うようになった。何故に明かりが灯つたままになつていったのか？ 何故深夜でも灯つているのか？ 人は住んでいるのであろうか？

昨年の暮れに、私は思い切つて、明かりの正体を確かめようと旧街道を左に回り、夕暮



れに光を放つ家の前をゆっくり走つて見た。

想像していたようにショーウィンドーの明かりであり、中にはマネキンがあつた。しかし、マネキンは裸で傾いており、茶色のシミのついた布が天井から落ちるように引っかかっていた。床には段ボールが散乱していた。人の気配はなかった。

ショーウィンドーの光は、社会に恨みを放つているように不気味で、明るかつた。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)